様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３５３０５
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３２３１

研究課題名（和文）アーカイブの活用による授受表現の新用法と新形態の普及に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Spread of the New Usage and New Form of Benefit Expressions Using Archives

研究代表者
尾崎　喜光（Ozaki, Yoshimitsu）

ノートルダム清心女子大学・文学部・教授

研究者番号：１０２０４１９０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、授受表現の新用法と新形態の普及について、過去に放送されたテレビ番組を言語資源と位置付けて活用し、過去数十年間の変化を明らかにすることを目的とする。また、小説の会話部分にも着目し、時代による変化や同一作家における変化を明らかにすることも目的とする。
注目した授受表現は、①「～してもらえる？」に対する「～してもらっていい？」のような表現、②相手に順路等を教える際「～たら近くにあります」でよいところを「～てもらったら近くにあります」とするような表現、③従来下降音調が使われていた文末の「～てください」を上昇音調にする表現などである。研究期間はデータの収集・蓄積に専念した。分析は今後行なう。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本語はさまざまな面に変化が認められるが、本研究で着目した、他者に働きかける表現に含まれることの多い受恵表現についても、その用法や表現に現在変化が見られる。それがいつ頃から普及したのかを明らかにすることは、日本語の変化の一端を明らかにするという点で学術的意義がある。また、新しい用法や表現は人々から違和感を持たれることが多いが、発生の原因が理解されればその受容にもつながり、ここに社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify a change and spread of the new usage and new form of benefit expressions in Japanese using archives (TV programs broadcast in the past). Also, we analyze conversation parts of novels to clarify these change and spread.
We pay attention to such new benefit expressions as (1)"-shitemoratte ii?" [vs."-shitemoraeru?"], (2)"-shitemorttara" [vs."-shitara"], (3)"-kudasai."(rising intonation) [vs. "-kudasai."(falling intonation)]. We concentrated to collect and accumulate data during three years. We will conduct an analysis from now on.

研究分野：社会言語学

キーワード：授受表現　アーカイブ　テレビ番組　言語変化　イントネーション　小説

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究が注目する授受表現の動態（変化）については、「犬にエサをあげる」のような表現の普及・定着が以前から話題になり、文化庁国語課の「国語に関する世論調査」でも調査項目とされ、その使用意識や実態が明らかにされている。しかしながら、授受表現の動態の中には、研究者でも気づきにくいものもある。

授受表現を含むそうした表現を大別すると、形態上の変化はないけれども用法が従来と異なる＜用法面＞で動態を示すものと、用法面での変化はないけれども形態が従来と異なる＜形態面＞での動態を示すものとがある。

＜用法面＞で動態を示すものとして研究代表者が注目したのは次のような表現である。

①知らない人から道を聞かれて教える場面等で、「右に曲がったらすぐです」で十分なところを「右に曲がってもらったらすぐです」のように、発話者（教え手）が恩恵を受けるわけではない情況で使われる授受表現の「もらう」「いただく」。

②「子供たちに学ばせるために」のような使役表現で十分なところを、「子供たちに学んでもらうために」のように使われる授受表現の「もらう」「いただく」。

また、＜形態面＞で動態を示すものとして注目したのは次のような表現である。

③従来の「手伝ってもらえる？」を「手伝ってもらっていい？」のようにする表現。

④多人数を前にしてのアナウンス等で出現する、従来の下降調の「御注意ください↓」に対する上昇調の「御注意ください↑」。

このうち①と③については、全国および特定都市を対象とする多人数調査で得られたデータを分析した結果を、研究代表者はすでに発表している。

本研究は、自身によるこうした調査結果をふまえ、過去約半世紀の間に放送されたテレビ番組（映像アーカイブ）および新聞のマイクロフィルムに残された新聞記事としての書き言葉（文字情報アーカイブ）を言語資料として活用することで、現在の日本人を対象とする多人数調査だけでは十分明らかにできなかったこれらの表現の発生・普及・定着の過程を明らかにする。

２．研究の目的

補助動詞としての授受表現は、現代日本語において使用頻度が高くかつ対人姿勢を明示する点で非常に重要な特徴である。しかしその用法や形態は必ずしも以前から固定したものではなく、現在動態を示す部分もある。たとえば、恩恵を受けるわけではない道教えの場面で使われる「右に曲がってもらったらすぐです」のような＜用法面＞での動態や、従来の「手伝ってもらえる？」を「手伝ってもらっていい？」とする＜形態面＞での動態が観察され、これらは現在増加傾向にある。

本研究では、こうした授受表現の新用法と新形態の発生・普及・定着の過程について、過去に放送され現在一般利用のために公開されているテレビ番組（アーカイブ）や小説の会話部分を言語資料として活用することで明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

次の 3 つの方法により資料を閲覧・記録・分析して研究を進めることとした。

(1)過去のテレビ番組を蓄積・公開している「放送ライブラリー」（横浜市）および「NHK 大阪放送局」（大阪市）において、放送開始以降の過去約半世紀の番組を視聴し、該当発話を記録・蓄積してデータベース化し分析する。データベースは、言いさしや言い誤り等も含めできるだけ忠実に文字化した発話（主として文単位）に加え、番組名、番組 ID、放送局名、放送日、番組ジャンル、発話者名、発話者の属性（放送時の年齢・性別）、発話相手名、発話相手の属性（放送時の年齢・性別）、番組内での出現時刻等を 1 件ごとに付加し、社会言語学的観点からの分析を可能にするとともに、研究代表者が必要に応じて再確認したり研究代表者以外が該当箇所に短時間でアクセスして確認できる設計とした。

(2)「日本新聞博物館」（横浜市）において過去の新聞のマイクロフィルムを閲覧し、該当する表現（特に「子供たちに学んでもらうために」のような表現）を記録・蓄積してデータベース化し分析する。

(3)過去半世紀の現代小説の会話部分の該当箇所を記録・蓄積してデータベース化し分析する。具体的には、1940 年代、1950 年代、1960 年代、1970 年代、1980 年代に生まれた作家を男女各 2 名、計 16 人を選び、各作家で上記の各年代に発表した小説を 2 作品ずつ選んで調査対象とした。1940 年代生まれの作家は計 10 作品が、1980 年代生まれの作家は計 2 作品が調査対象となる。このように調査設計することで、各年代における当該の授受表現の使用が全体としてどうであるか、全体としてどのように変化しているかが捉えられるのみならず、1950 年代以降については作家の年齢層による違いの有無を把握したり、1940 年代から 1970 年代に生まれた作家については、特定の作家が発表した小説を発表年代ごとに追跡することで個人の中における当該表現の変化の有無をも明らかにすることをめざした。小説の会話部分と言う制約は伴うが、授受表現の変化について、年齢差や個人内変化という観点も取り入れた多角的な調査設計とした。

なお、上記のうち(1)については、「NHK 大阪放送局」での研究利用の日数には制約があり、大量のデータ収集のためには限界があることが明らかになったことから、そうした制約のない「放送ライブラリー」でのみデータ収集することとした。また、上記のうち(2)の「日本新聞博物館」

での調査については、研究の第 1 年次からマイクロフィルムの閲覧サービスが廃止されたことから断念せざるを得なくなった。

４．研究成果

3 年間研究を行った結果、テレビ番組の調査については、「研究開始当初の背景」に記した①と②は分析に耐えるだけの十分なデータが得られなかったが（このうち②はもともと新聞での調査からデータを得ることを予定していた)、③については関連データを含めて 313 件、④については 1,228 件のデータを収集・蓄積した。

データ収集のために視聴した番組数は 221 番組であった。実際の発話ではないもののそれに近い発話が得られることが期待され、かつ人物間の依頼場面が比較的高頻度で出現することが見込まれる「ドラマ (現代ドラマ)」をまず集中的に視聴してデータを収集・蓄積した。その後、実際の発話が含まれる「ドキュメンタリー」や、ゲスト出演者同士による実際の発話のやりとりで構成される「芸能・バラエティー」にも調査対象ジャンルを拡大した。このうち、「～てもらえますか？」に対する「～てもらっていいですか？」が比較的よく収集できたのは、「芸能・バラエティー」の「マジック（手品)」の番組においてであった。マジシャンからスタジオに来ている観客に対し協力を求める場面で現われることが少なくなかった。一例を示すと、NHK 総合テレビが 2004 年 4 月 3 日に放送した「素敵にショータイム〔1〕　浪花（なにわ）の歌姫ライバル対決」の一つの番組コーナーにおいて、マジシャンのマギー審司（当時 30 歳・男性）が、観客に向けてステージから、「～ていただいていいですか？」という新しい表現を次のように使いながら依頼している。

「で、これから「せーの」って言いますんでぇ、皆さんでおっきい声で「ラッキー！」って呼んでいただいていいですか？」

また、小説の会話部分の調査については、1940 年代から 1980 年代に生まれた男女 16 人の作家による計 80 作品を対象に、アルバイタによる前段階の処理（該当表現へのマーク付け）までを完了した。今後研究代表者が該当箇所を確認してデータベース化する。

いずれの調査もデータの収集・蓄積に 3 年間注力した。今後はこれらのデータを分析し論文化する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計　0 件）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。